

聖書の教える公同的礼拝 その必要性、その重要性

マラナサ・グレース・フェロシッポ 菊地 一徳氏

それでは、**ゼカリヤ書の 14 : 16~18** を、今日のテキストにしたいと思います。この中から一つの主題を引き出しました。それが「公同の礼拝」というものです。公（おおやけ）の同（おなじ）と書いて「公同の礼拝」または「公衆礼拝」とも表現できます。パブリックという意味での公衆礼拝です。今日の主題説教、聖句説教の題目は、「聖書の教える公同的礼拝」ということで、その必要性、その重要性もいろんな聖句からお伝えしていきたいと思います。先ず「公同の礼拝」という言葉の意味は、読んで分かると思いますが、公に集まって、みんなで揃って礼拝をすることです。単純に言えば、共に集まって礼拝することですから、私たちが毎週のようにしていること。ある人たちは、「公同礼拝」と言えば「日曜礼拝」とすぐに連想して、それが唯一の公同礼拝のように思っている方もいるかもしれませんが、日曜礼拝だけが、公同礼拝ではありません。共に集まって、一致して、主に礼拝を奉げることはすべて公同礼拝です。

それと区分けして、「個人礼拝」、プライベートの礼拝、一人でも私たちは神様を礼拝できます。一人でも、賛美し、祈り、聖書を読むこともできます。それとは別に、公同の礼拝というのがあります。兄弟姉妹が共に集まって、主を礼拝するということです。また家庭においては、個人礼拝に付随して、「家庭礼拝」ということもできます。聖書の中にも、個人が主を礼拝することも、また家族で揃って家庭礼拝を奉げるということも書かれています。でも個人や家庭礼拝を超えて、公同の礼拝または公同的礼拝というのが最も優れた礼拝であるということも、今から聖書の箇所を通して皆さんにお分かちしていきたいと思います。

そして、英語で私の好きな言葉が”Corporate Worship” という言葉です。”corporate” これは、コーポレーションといえは会社のことを言いますが、それと同じ言葉であります。意味は「共同、組織」とも日本語で訳されます。”corporate” というだけでも「会社」と意味づけられますが、もともこの”corporate” という言葉は、ラテン語の”corpus” 「体」という言葉からきています。教会は、「キリストの体」と呼ばれています。その体が、共に礼拝を奉げる。生きた組織として、団体の組織というよりも、本当に生きたキリストの器官が集まる組織として、それぞれの機能を果たしながら、それぞれの役割を果たしながら、それがハーモニーをなして、一致して、主に礼拝を奉げる素晴らしい体験であります。ですからこれは「個人の礼拝」をはるかに超えた体験となります。そのような「公同の礼拝」または”Corporate Worship”。「共同の礼拝」、「公同の礼拝」同じことでもあります。ただ教会用語として「公同」という言葉が使われますので、それは頭の片隅に覚えて欲しい用語です。

テキストの中から、その「公同の礼拝」または「共同の礼拝」、「公衆礼拝」といってもいいと思いますが、そのテーマを意識しながら、**ゼカリヤ 14 : 16~18** を最初に通してお読みしたいと思います。

16 : エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。

17 : 地上の諸氏族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエルサレムへ上って来ない氏族の上には、雨が降らない。

18 : もし、エジプトの氏族が上って来ないなら、雨は彼らの上に降らず、仮庵の祭りを祝いに上って来ない諸国の民を主が打つその災害が彼らに下る。

ここから「公同の礼拝」、「共同の礼拝」、「公衆の礼拝」ということをテーマに学んでいきたいと思います。

「仮庵の祭り」も馴染みのない方のために、少し聖書を開いて、どんな祭りなのかということも、話し

ておきたいと思います。先ずレビ記 23 : 34~43 を開いて下さい。

- 34 : 「イスラエル人に告げて言え。この第七月の十五日には（太陽暦でいうところの9月から10月のことです。）、七日間にわたる（一週間の）主の仮庵の祭りが始まる。（ですから、これは秋のシーズンに行われる祭りであるということです。この時には、秋の収穫も同時にお祝いされますから、農業祭のような意味合いもあります。ほとんどイスラエルの民は、約束の地に入ってから、農業を営むわけです。）
- 35 : 最初の日は聖なる会合であって、あなたがたは、労働の仕事はいっさいしてはならない。
- 36 : 七日間、あなたがたは火によるささげ物を主にささげなければならない。八日目も、あなたがたは聖なる会合を開かなければならない。（会合といわれているのは、礼拝のことです。）あなたがたは火によるささげ物を主にささげる。これはきよめの集会で、労働の仕事はいっさいしてはならない。（このきよめの集会も礼拝のことです。いろんな儀式が伴うものです。）
- 37 : 以上が主の例祭である。（例祭というのは、毎年行われるということです。9月から10月の15日から一週間、毎年この仮庵の祭りがお祝いされます。）あなたがたは聖なる会合を召集して、火によるささげ物、すなわち、全焼のいけにえ、穀物のささげ物、和解のいけにえ、注ぎのささげ物を、それぞれ定められた日に、主にささげなければならない。（細かい規定がありますが、この規定をしっかりと守って、すなわち聖書の御言葉に沿って正しい礼拝を奉げなさい、という命令です。）
- 38 : このほか、主の安息日、また、あなたがたが主にささげる献上物、あらゆる誓願のささげ物、進んでささげるあらゆるささげ物がある。（礼拝には、当然いけにえが伴うわけです。犠牲が伴います。）
- 39 : 特に、あなたがたがその土地の収穫をし終わった第七月の十五日には、七日間にわたる主の祭りを祝わなければならない。最初の日は全き休みの日であり、八日目も全き休みの日である。
- 40 : 最初の日に、あなたがたは自分たちのために、美しい木の実、なつめやしの葉と茂り合った木の太枝、また川縁の柳を取り、七日間、あなたがたの神、主の前で喜ぶ。（喜ぶ、とありますが、申命記 16 : 13 ~ 15 にもこの仮庵の祭りの規定があります。そちらでは、『この祭りを喜びなさい』と命令されています。実は、イスラエルの祭りの中で一番喜びに満ちている、歓喜に満ちている祭りこそ、この仮庵の祭りです。なぜなら、主が『喜びなさい。』と命令されているからです。ですから、これが祭りの特徴でもあります。収穫がありますから、自然に喜べるのですが、特にこの祭りでは、喜ぶことを強く意識するように、歓喜に満ちた、喜びに溢れた、喜び爆発といったような祭りです。それが礼拝でもあります。）
- 41 : 年に七日間、主の祭りとしてこれを祝う。これはあなたがたが代々守るべき永遠のおきてとして、第七月にこれを祝わなければならない。
- 42 : あなたがたは七日間、仮庵に（仮の住まいです。これは、あとで説明しますが、木の枝で組んだみすばらしい質素な小屋です。テントのようなものです。）住まなければならない。イスラエルで生まれた者はみな、仮庵に住まなければならない。
- 43 : これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、彼らを仮庵に住ませたことを、あなたがたの後の世代が知るためである。わたしはあなたがたの神、主である。」

（レビ記 23 : 34~43）

繰り返しますが、毎年第7の月、9月から10月の15日から七日間、一週間、仮庵の祭りを祝うように、と規定されています。秋の収穫と重なる時期でもあります。その祭りの意義というのは、何を記念するのか、何を祝うのかということ、イスラエルの民が400年間エジプトで隷属状態でありました。奴隷としてこきつかわれてきたわけです。しかし、そこから主が解放し、約束の地へとイスラエルの民およそ300万人を導き入れて下さったわけです。そのエジプトの地から向かう道中に、イスラエルの民が荒野を漂泊した

時に、この仮庵生活をしたわけです。テント生活、天幕生活を送ったわけです。そのことを記念した祭りです。主に不従順であったために、荒野を40年間も流浪することになったんですが、それでも神様はイスラエルの民と共におられて、彼らを見捨てずに、不思議な守りと御手を差し伸べて、彼らの必要のすべてを満たし、彼らを約束の地へと導き入れて下さいました。この仮庵の祭りを祝うために、イスラエルはその仮の庵、仮小屋、天幕と呼ばれるものを建てるわけです。毎年一週間その中で実際に生活するように命じられています。自分の家を出て、仮庵を作って、その中で家族で一週間過ごすのです。言うなれば、ファミリーキャンプみたいなものです。そして、そのファミリーキャンプの中で、神様のなされた御業。そして、神様がいつでも共にいて下さる、守って下さる、必要のすべてを満たして下さる、そのことを家族で、みんなで味わい知るように、キャンプ生活を通してそのことを実感できるように。それが、この仮庵の祭りで祝われる内容・意義であります。特にファミリーキャンプでお父さんが子供たちに、自分たちの先祖が荒野を放浪中に神様が、荒野の中心に置かれていた幕屋に宿って下さり、昼は雲の柱、夜は火の柱で導いて下さった。その間、不思議なことをなされて、私たちは養われ、そして敵からも守られて、そして約束の地へと導き入れられたと。そのことを小屋の中で語らうわけです。なるべく粗末に作るというのが秘訣です。快適な小屋を作りません。そして、中に入って星空が見えるような本当にみすぼらしいもの、安心して眠れない程度の小屋を作るそうです。そして一方が開いている状態にして、夜風が肌で感じられるような作りを、意図的にします。そのことによって荒野生活における不安な実感、心細い追体験というものを敢えて、このキャンプを通して家族で味わうわけです。何故そんなことをわざわざするかというと、それはあくまで「仮の家」である、「仮の小屋」である、「ただのテント」であると。私たちの家は、この地上には無いということ、子供たちにしっかり教えるために意図的にボロい家を作るわけです。強風が吹いたら倒れそうな小屋を作るわけです。逆に、私たちの家は、朽ちることのない、倒れることのない、永遠の住まいである。今私たちの地上での生活は、一時的な世界に生きている一時的な生活にすぎないと。私たちの本当の故郷は、地上ではなく天にある。そして私たちの家は、朽ちることのない堅固な永遠の住まいである。そのことを子どもたちにも実体験させる。これが仮庵の祭りの目的でもあります。これで、仮庵の祭りがどんなものかイメージがついたと思います。その上でもう一度テキストに戻って頂いて、ゼカリヤ14章です。テキストは、**ゼカリヤ書の14:16~18** ですが、この中で時代背景も少しお話ししたいと思います。これはイエス・キリストがこの世に来られる500年位前の話で、預言書です。特に未来のことを預言しています。時間があれば14章全部を読みたいところですが、特にゼカリヤ14:1を拾い読みしたいと思います。

1:見よ。主の日が来る。その日、あなたから分捕った物が、あなたの中で分けられる。

「主の日」とは、結論から言うと、「再臨」のことです。これは、イエス・キリストが再びこの世に戻って来られる。そして、地上に降り立つので、「地上再臨」とも言います。実際に何処に立つかということも、14:4,5 に書いてあります。

4:その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。

5: 山々の谷がアツァルにまで達するので、あなたがたは、わたしの山々の谷に逃げよう。ユダの王ウジヤの時、地震を避けて逃げたように、あなたがたは逃げよう。私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。

イエス・キリストがここでは「主」と呼ばれています。この方がオリーブ山の上に立ちますと、地殻変動が起きて、山が真っ二つに分かれて、大きな谷ができます。5節の終わりに、『私の神、主が来られる。』これは、イエス・キリストのことです。再臨の主、イエス・キリストのことですが、そのあとに『すべての聖徒たちも主とともに来る。』この「すべての聖徒たち」というのは、実は私たち教会のことです。これは勿論未来預言なのですが、黙示録 19～20 章にこの場面のことが再度預言されています。もっと詳しく具体的にイエスがどんな様で地上再臨されるのか、白い馬に乗ってやって来られます。そして、私たち花嫁もそのイエスに従って、白馬に乗って地上に降り立ちます。ですから、これは私たちも体験する話ですから、是非興味を持って欲しいと思います。この場面を私たちは見ることになります。そして私は、これは遠い未来の話ではなくて、近未来の話だと確信しています。そのあとに再臨の主が、王とされます。エルサレムにヘッドクォーター（本部）を置きまして、エルサレムが世界の中心となって、王座を主がそこに設けられて、全世界を、地球を統べ治められます。イエスが文字通りエルサレムで王座に着いて治める王国のことを「メシヤ王国」、またはそれが千年の統治になるので「千年王国」英語で言えば”Millennium kingdom”と呼ばれるものが到来します。「千年王国」は、地球がかつては罪により完全に破壊され、汚染されて、もう修復不可能という状態にきているところを、天地創造時の、まだ罪が入っていない人間が墮落する前の世界につくり変えて、そして、南極も北極もまるで沖縄やハワイのような楽園に変わるわけです。弱肉強食もなくなります。勿論戦争もなくなります。千年間の平和と繁栄が訪れるわけです。イエス・キリストが文字通り地上で王とされるからです。王の王、主の主として再臨されます。

そして、その千年王国の統治の間に、地上でこの「仮庵の祭」がお祝いされます。テキストで読んだところは、ゼカリヤ 14：16 からですが、

16：エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな（この生き残った者とは、丁度イエスキリストが地上再臨される前に、生き残ったサバイバーたちです。イエス・キリストが再臨される前の最終段階を私たちは「患難時代」と呼んでます。”Tribulation”それは7年間に及びます。世の終わりになると、患難な時代がやって来ます。そして、教会はその患難時代の前に、地上から空中に引き上げられます。これを私たちは、「空中再臨」もしくは「携挙」としてこれまでも学んできました。教会が地上から取り去られた後に、「反キリスト」と呼ばれる世界総統が、ヨーロッパから彗星の如く登場します。そして、偽預言者と共にタッグを組んで、そして、その頂点には勿論サタンがおりますから、悪の三位一体がつくられて、そして世界は、これまでかつて経験したことのないようなおぞましい、恐ろしい時代になります。それが「患難時代」です。イエス・キリストを拒絶した勢力がはびこるのですが、それに対して、神様が怒りを注がれます。そして、その患難時代を生き残った者たちが、ここに言われている人たちです。）**（彼らは）、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。**

この生き残った者たちは、全員、反キリストにくみしなかった者たちです。具体的には黙示録 13 章に書かれている「獣の刻印」を受けなかった者たちです。反キリストのしもべにならなかった者たち。一度「獣の刻印」を受けてしまうと、それは額か右手の甲に刻印を押されます。恐らくそれは、現代でもう流通が始まっているマイクロチップのようなものです。すべての情報が米粒大のマイクロチップに収められて、それをつければ、財布もいりません、身分証もいりません。そして、迷子になっても GPS で見つけてくれます。誘拐されても大丈夫です。すべて監視されています。そして、場合によっては脳波までコントロールされて、もはや自分の意思では動けないような、プログラミングされた従順なロボットにすらつくり変えられてしまいます。それを受けてしまえば、その人は救われることは決してありません。

でもここでの生き残りの人たちは、それを敢えて受けなかった者たちです。それを受けないと、商売ができません、売買もできません、ようするに普通には生活できなくなります。それでもなお反キリストにひざまづかなかった者たち、彼らの中で生き残った者が千年王国に入れられていきます。そして、彼らのなすべきこととして、毎年仮庵の祭りをお祝いするために、礼拝を奉げるために、どこにいてもエルサレムに巡礼に行かなければならないということが、ここに命じられています。興味深いことに、千年王国において、「仮庵の祭り」"the feast of tabernacles"だけが、再開されるようにここには描かれています。

もし、この命令に背いてエルサレムに仮庵の祭りをお祝いに行かない場合は、17節を見て下さい。

17：地上の諸氏族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエルサレムへ上って来ない氏族の上には、雨が降らない。(エルサレムに礼拝に来ない者には、雨が降らない。)

別にエルサレムに礼拝に行く気なんてありませんと、(エジプトからエルサレムはそんなに遠くはありませんが、) ちょっと面倒だと、エルサレムは標高800m程の小高い台地であり、そんな高いところへ登っていくのは嫌だ、負担だ、お金もかかる、費用もかかる、ガソリン代もかかる。そのようにエルサレムに礼拝に行こうとしない、またそのための努力をしない、その人たちはどうなるのか。雨が降らないということです。要するに渴いてしまう、干からびてしまう。乾燥地帯で雨が降らないというのは、死活問題でもあります。具体例としてエジプトのことが挙げられていますが、エジプトの地帯も乾燥地帯ですから、日常的に雨が降るわけではありません。でも、自分たちはどうせそのような乾燥地帯に暮らしているのだし、雨が降らないなんてもう慣れっこだと、雨が降らない程度だったら別にいいです。面倒くさいから行きません。乾くぐらいだったら、干からびるぐらい慣れっこです。昔からそうやって乾いてきたんです。いまさら雨が降らなくなっても大丈夫です。わざわざエルサレムに行くのは面倒なんです、負担なんです、お金もかかります、時間もかかります、疲れるんですと、いう場合はどうなるのか。

18：もし、エジプトの氏族が上って来ないなら、雨は彼らの上に降らず、仮庵の祭りを祝いに上って来ない諸国の民を主が打つその災害が彼らに下る。

『主が打つその災害が彼らに下る。』とあります。エジプトで災害といえば、聖書の中で、あの10の災い、10の災害がありました。おぞましい災害です。それをエジプトは知っていますので、それを聞いたら、「分かりました。雨が降らない程度だったら行かないつもりでしたけど、こんな災害がまた再現されるならば、分かりました。行きます。」と。最終的には10番目の災害が一番つらいものでありました。それぞれの家の初子が、殺されてしまう、命をとられてしまう。我が子を失うことほどつらいことは無いと思います。「子供に先立たれてしまう、そんな不幸が襲ってくるならば、分かりました。雨が降らないのは我慢できますが、これは我慢できません。あまりにも辛すぎます」と、いうことでエジプトの民はエルサレムに巡礼に行くことになろうかと思えます。雨が降らない程度、どうせ砂漠地帯だから、どうせ私はこれまで渴きを散々味わってきたから。「雨は本当に必要なものですが、必要が満たされない程度ならば、我慢します」と。でも、災いならどうでしょうか、呪いならば、裁きならばどうでしょうか。そのことがここにも問われているのですが、私たちにも合わせて問われているかと思えます。

共に集まって主に礼拝を奉げること。それを「公同の礼拝」英語では"Corporate Worship" と言います。それは、素晴らしい体験、素晴らしい特権、素晴らしい祝福をもたらすのですが、もしあなたが面倒がって「いや私は家でも礼拝できますよ。わざわざ教会なんて、遠いし、お金もかかるし、行けば疲れるし、パスします」と。その人にはどういうことが起こるかということ、渴きが起こります。「雨が降らない」とあ

ります。渇くようになります。心が渇くということを、想像してみてください。心が干からびるような、心が砂漠状態のような、不毛な状態です。一切潤い也没有、満たし也没有。当然、実もならないわけです。不毛な人生となります。いつでも満たされない思いです。渇いていますから、虚しいばかりです。渇いていますから、満たされていませんから、当然、不平不満がもれてくるわけです。欲求不満が溜まってくるわけです。フラストレーションがどんどん積み重なっていきます。いつでもイライラする、いつでも苦々しい思いをしている、いつでも非難・批判が心の中も頭の中も口からも溢れてくるわけです。それが渇きという状態です。皆さんは、そんなのは嫌だと思えば、是非教会に来て共に礼拝を奉げて下さい。でも、「渇いたままでもいい、雨が降らなくていい、一人でも礼拝できるし。そもそも私は群れるのが嫌なんです。大勢のところは嫌なんです、または苦手なんです」と。または「教会は偽善者の集まりじゃないですか。だからそんなところへ行きたくないんです。」そのように教会を嫌う人もいますけれども。それなら、まさに教会は、そんなあなたに似つかわしいところだと思います。なぜなら「教会には偽善者しか集まらない」と言っているあなたこそが、偽善者だからです。ですから「教会は偽善者の集まり」と言っているならば、あなたがまさにピッタリの人ですから、是非教会に来て下さい。もちろん、これは皮肉で言っていますけど。教会に集まっている人が、全員偽善者だと言っているわけではありません。偽善者は。イエス・キリストが忌み嫌われますけれども、いろんな理由を付けては、こじつけては、共に集まって礼拝を奉げない、公同の礼拝を避けてまわる、逃げてまわるというのが、私たちの中にも傾向としてあるかもしれません。「一人でも、または家でも、家庭礼拝でもできます。またはインターネットでもできます。またはテープやCDのようないろんな媒体があります。本もあります。」いろんなことで私たちは理由をつけては、この「公同の礼拝」というものを避けようとしませんが、結果は渇くだけです。結果は不平不満を言うばかりです。結果は常に人を指さして非難ばかりします。「あの教会はどうだ、この教会はどうだ、この牧師はどうだ」とか、そんなことしかあなたの頭の中に思い浮かびませんし、苦々しい思いで一杯になってしまいます。結果的には、すべてに落胆し、幻滅し、絶望し、鬱状態に陥ります。それでもあなたは良いと、言うならば、さらにもう一言加えたいと思います。災害があなたの上に下ります。「いいです。私は一生苦々しい思いで生きるんです。一生鬱でいいです。一生私は不平不満でフラストレーションが溜まる人生を送りたいです。」でも、さらに輪をかけて、あなたには災いが下ります。考えられないような災いが下ります。具体的には、エジプトに下った10の災いをイメージして頂きたいと思います。それが一つ一つあなたに下ってきます。それが嫌ならば、是非教会に来て、礼拝を共に奉げて欲しいと思います。脅してるわけではありませんが、これが御言葉が教えていることであります。千年王国の時代、何の問題もないはずですが。罪から人々は解放されています。罪によって汚染された世界は、もうそこにはありません。イエス・キリストが目の前にいて下さるのです。文字通りイエスを見ることができません。エルサレムに行けば、イエスに会える。なのに、エルサレムに巡礼に来ない。今は、文字通りイエスを肉眼で見ることができません。でも教会に行けば、イエス・キリストに会えます。イエスがおっしゃった言葉を思い出して下さい。

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

(マタイ 18 : 20)

『ふたりでも三人でもイエスの名によって集まる』これが重要ですが、ただ好きに集まって、クリスチャンが集まれば、それでも教会だというわけではありません。イエスの名によって集まるのが大事ですが、そこにはイエスがおられますから、必ずイエスに出会えます。教会に集まるということは、イエスに会いに来るということです。万軍の主であり、王であるお方を、拝するという事です。人に会い

に来るのではありません。牧師の話を聞きにくるのではありません。ただ賛美の歌を歌いに来るのではありません。万軍の主であり、王であるイエス・キリストに会いに来るのです。それは、一人では叶わないことです。クリスチャンは一人でも礼拝できますが、勿論そこでイエスを拝する、賛美することもできます。でもそれは不十分だということです。必ず共に集まって、そこにふたりでも三人でもです。一人でもとは書いてありません。ふたりでも三人でも。最低でもふたり三人必要です。そうすればイエスが三人目・四人目になってくださるのです。

ここでヘブル 10 : 23~25 も参照して頂きたいと思います。

23 : 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。(今動揺している人がこの中にいるでしょうか。希望を告白できない絶望状態の人がいるでしょうか。あなたには励ましが必要です。)

24 : また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。

25 : ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。

ある人々のようにいっしょに集まることをやめたりしてはいけません。「公同の礼拝」をなおざりにしてはいけません。後回しにしてはいけません。かえって「いっしょに集まろうよ。」と励まし合って、『かの日が近づいて』いるから、これが大きな動機になります。目標になります。「かの日」とは、イエス・キリストが私たちをお迎えに来る日、教会が地上から引き上げられるその日は、「携挙」と呼ばれる日は、「空中再臨」と呼ばれる日です。その日がちかづいているから。これは大きな動機付けです。イエス・キリストが戻って来るということを全く信じない人たちは、別に「公同の礼拝」に特別な価値を置きません。でも、その日が近づいているから、「ますます」とあります。より一層ということですから、全然今の状態では、現状では、足りていませんよ、ということが指摘されてるわけです。足しげく私は教会に通っています。でもますますそうしようではありませんか。日曜日の礼拝で精一杯です。いや、ますます集まろう。日曜日の礼拝だけで満足してはいけません。MGFでは火・木・金と、今日は金曜日ですから午後とそして夜も2回あります。で、日曜日に来ます。月末には2回礼拝があります。それでも本当は足りないのです。十分ではありません。それに私は全部出席してますよ、すごいでしょ、とあなたは言うかもしれません。かの日が近づいているのですから、これ以上に私たちはもっと求めていかななくてはなりません。世の終わりは近いのです。携挙のあとに、すぐに反キリストが現れて、7年間の患難時代が訪れて、それで終わりです。それで世界は”The End.”です。最終戦争のハルマゲドンが7年間の終わりに起こって、そこにイエス・キリストが、天から地上に降り立ちます。その日が地上再臨ということで、そのあとに、イエス・キリストが文字通り王の王、主の主として地上を統べ治められます。ですから、その日が近いということを覚えて欲しいと思います。これが「公同礼拝」の一つの動機付け、目標ともなります。

もう一箇所、I コリント 11 章。有名な聖餐式の規定が記されている箇所です。特にその箇所からいくつか拾い読みしたいと思います。

18 : まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき (MGF の集まりをするときも考えて欲しいと思います)、あなたがたの間には分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます。(私もある程度はそれを信じます。)

19 : というのは、あなたがたの中でほんとうの信者が明らかにされるためには、分派が起こるのもやむをえないからです。(ですから、びっくりしないで下さい。兄弟姉妹が集まっているのに、どうしてこん

なに争いがあるのか。どうして分裂分派があるのか。勿論、人間的な肉的な思いから誰が一番になるのか、誰が一番偉いのか、そんなことで喧嘩になる権力争い、そういうことも起こりうるのですが、でもそれだけが分裂分派の理由ではありません。中には本物の信者と本物でない信者がいますから、当然本物の信者といわゆる偽物の、偽クリスチャンとは一緒に、一つになって礼拝を奉げることは出来ませんので、または奉仕を奉げることは出来ませんから、必然的にその場合は分けられるということです。）

26：ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに（聖餐式を行う度に）、主が来られるまで（イエス・キリストが私たちをお迎えに来る「携拳」の時まで）、主の死を（十字架の尊い贖いの死を）告げ知らせるのです。

聖餐式の度に私たちが覚えなくてはいけないことは、「主が来られます。」毎回聖餐式の時に覚えて下さい。この聖餐式の時に「イエスが迎えに来る」という切迫感をもって私たちは、もちろんそれは怖いという体験ではありません、あわてふためくような体験ではありません。それほど楽しみにしながら、パンを食べ、杯を口にしたら時、「イエスが迎えに来る」。素晴らしいですね。

そして「主の死」。これは、私たちの罪のために、罪のない方が罪を背負って身代わりとなって、あのおぞましい十字架の死を遂げて下さった。こんなに素晴らしい愛は、他にはないということを、それを自分たちが覚えるだけでなく、告げ知らせるとあります。ただ「主の死」を記念して、感謝して、忘れないように覚えるだけでなく、それを私たちは積極的に告げていく必要があります。いわゆる伝道していく必要があるということです。これも勿論礼拝で行われることなので、「聖餐式」も「公同礼拝」の中心であります。カトリックでは、この聖餐式を『聖体拝領』とも言って『ミサ』というふうにも位置付けられて、中心となるほどであります。ですから「公同礼拝」の目標としては、世の終わりが近い、ということに常に覚えて、いい意味で緊張感をもって、切迫感をもって、毎回集まる度に、主が戻って来られることを意識して、ますます集まろう、そして聖餐式においてもそのことをいつも確認しよう、だから私たちは集まるんだと。一人でも家で聖餐式を行うことは勿論できます。でも教会で私たちは共に、主のテーブルに連なって、そして共に主の日を待ち望むということです。それが、公同礼拝の常に目標とすることです。中には、イエス・キリストが戻って来られることを、全く信じていない人たちもおります。その人たちからすれば、この「公同礼拝」というのは、それほど価値のないものに多分感じられていると思います。「別に行っても行かなくてもいいや、今日は都合が悪いし、今日は疲れているし、今日は体調も悪いし、忙しいから、面倒くさいから。」いろいろな理由で後回しに、または毎週あるんだから別に今週スキップしたって休んだっていいじゃないかと。もしあなたが休んだ時に、イエスが戻って来られたらどうでしょうか。考えて欲しいと思います。今日が地上の最後の日かもしれない。その時、私たちが共に集まって礼拝をしているならば幸いです。イエスと対面するその瞬間、共に兄弟姉妹が心一つにして礼拝して、その時にイエスが戻って来られる、これ程幸いなことはないと思います。イエスが戻って来られる時、あなたは「今日は礼拝に行くのをやめよう、疲れたから、家でゴロっとしよう、テレビでも見よう、インターネットでもサーフィンしながら、雑誌でもめくりながら、ゲームでもして、または、映画館でも行ってちょっと気休めしようか、旅行にでも行って礼拝を休んじゃえ」。もしその時イエスが戻って来られたらどうでしょうか。そのことも「公同礼拝」の動機付けになろうかと思えます。私たちは、そんな姿で、そんな状況で、イエスに迎えに来られたら、本当につらいと思えます。これ以上の後悔はないと思えます。皆さんも人生をある程度長く生きてますから、いろんなことをしてきて、いろんな後悔をしてきたと思えます。取り返しの付かないことをしてしまったと思えます。でも、イエスが迎えに来られる時、あなたがもし「公同礼拝」を奉げていなかったならば、ショックですね。勿論イエスがいつ戻って来られるか、「公同礼拝」をしている最中でないと戻って来ないという意味ではありませんけれども、でも、もし礼拝とかけ離れた

ような肉的な罪深い行動をしているならば、イエスが戻って来られたならばどうでしょうか。ショックだと思います。何てことを自分はしてしまったのか、これ以上ない後悔だと思います。

で、もう一つ、この「共同の礼拝」に共に集まって礼拝を奉げないという人たちの中には、このゼカリヤ書の14章でも言われているように、礼拝の対象は万軍の主である王であると。その方を礼拝したくないということは、何を意味するか。その人は、神様のことを、イエス・キリストのことを万軍の主とは認めていません。また王様だとは認めていません。逆に、あなたが喜んで「共同の礼拝」に集うならば、あなたの中では、「イエス・キリストこそ万軍の主です。この方こそ、王の王、主の主です」という認識を持って、この方は私の礼拝を受けるにふさわしい方、当然だ、礼拝しない方がおかしい、とすら思います。でも礼拝に来ないということは、「別に神様が私の王だとは限らない。今は私が王様でいたい。好きなように自分が権力をふるって、自分が神でいたい。」そういう人は、やはり礼拝に来るのを嫌います。自分が王でいたいからです。礼拝に来るということは、自分が王でなくなるわけです。それは悲しいことです。もう好きなことができない、やりたい放題できない。礼拝しない人は、神様を、またはイエスを主としない、王としない、そういう人たちであります。

そしてもう一つ、いくつか「共同の礼拝」にまつわるポイントを挙げたいと思いますが、「共同の礼拝」は、もちろん共に集まって礼拝することですが、なぜ共に集まって礼拝しなければいけないのか、今まで話したところにもその理由を見出して頂けたと思います。ただ単に、「雨が降らないのが嫌だ、渴きたくないからとか、裁きを受けたくない、災いを受けたくないから。」そういうネガティブな否定的な消極的な理由ばかりではありません。むしろ積極的な理由にも目を留めてほしいと思います。「共同の礼拝」は、一番シンプルな理由として、先ほど挙げたように、礼拝の対象者である方が、「共同の礼拝」を受けるにふさわしい方だからです。この方こそ、賛美を受けるにふさわしい方です。それが一番シンプルな理由です。もう一つシンプルな理由は、聖書の中に私たち信仰者が「共同の礼拝」を奉げるようにと命じられているからです。仮庵の祭りの場面では、人々は毎年、間違いなく、エルサレムに集まるようにと命令されていました。かつての神の民は、皆、礼拝する民でありました。出エジプト19:6には、

あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」(出エジプト19:6)

イスラエルの民は、『祭司の王国、聖なる国民』と呼ばれています。イスラエル国民は全員祭司である。もちろんレビ族がその中では、聖職者としていろいろ専門家としての祭司としての役割は確かに与えられますが、原則イスラエルの民は全員もれなく祭司である。イスラエルは、祭司の王国である。これは、前回お話したポイントでもあります。新約時代において、イエス・キリストを信じる民は、同じようにイスラエルの民に組み込まれて、全員祭司であると。万民祭司という話をしました。これは、イスラエルからきている話です。その祭司というのは、主なる神を礼拝する民です。イスラエルは、「祭司の王国」と呼ばれていますが、それは、主なる神を礼拝する民、そのために集会する民です。これが「神の民」です。それが「神の民」としての存在意義、目的であります。主なる神を礼拝する民、そのためには集会する民。言い換えれば、もし礼拝しないならば、礼拝するために集まって「共同の礼拝」を奉げないならば、あなたはもはや神の民ではないということです。あなたはイスラエル国民ではない、と言っているわけです。その者は除外されます。使徒7:38に「荒野の集会」という言葉が使われています。

また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの父祖たちとともに、荒野の集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです。(使徒7:38)

ステパノの説教の中で、「荒野の集会」という言葉が使われています。新改訳聖書には*印がついていますので、欄外を見て下さい。「エクレシア」となっています。これは、教会という言葉の原語でもあります。新約聖書の中で『教会』という言葉が使われているところには、この（エクレシア）”ekklesia”という原語が使われています。集会も教会も同じ言語です。『エクレシア』の意味は『召し出された者たちの群れ』です。『呼び出された者の集団』、これが『エクレシア』ですから、『集会』という方がむしろ言語のニュアンスを踏んだ訳となっているかもしれません。または、『召集された集まり』と意味で言うならば、『召会』というふうにも言えるでしょう。実際にそういう言葉を使っている教会も一部あります。または『教会』。皆、『エクレシア』であります。ですから、かつての『イスラエルの集会』、『荒野の集会』、これは、『教会』のモデルだったわけです。そして、その荒野の集会、イスラエルは『祭司の王国』で、主なる神を礼拝する民、そのために集会する民でした。それが、『荒野の集会』であるならば、私たちも新約時代において、教会として同じでなければいけません。主なる神を礼拝する民、そのためには集会する民、それが教会です。それが私たちクリスチャンです。主を礼拝しないならば、そのために集まって集会しないならば、それはもはや、クリスチャンではないということです。神の民とは言えない、ということです。悔い改めて下さい。もし、礼拝することを第1としていなかったならば。それがあなたのライフワークだと考えていなかったならば。

クリスチャンは「公同の礼拝」を奉げるために、この世から召し出された者たちです。それが『エクレシア』です。どこから召されたのか分かりますか。罪の世界から、霊的エジプトから。パロというサタンに私たちはこきつかわれていた罪の奴隷でした。でもそこから私たちは、貴い小羊の血潮によって贖い出されたのです。過ぎ越しを体験したわけです。それが十字架であります。そして私たちは、この主と共に十字架につけられ、そして甦り、新しくつくられた者となりました。それは、かつては罪の奴隷でありましたが、今からは主のしもべとして、神の民として礼拝することを主目的とした民。そして礼拝するためにつくられた新しい人として、私たちはここに置かれているわけです。ここに生かされているのは、何のためか。金儲けのためではありません。人生で成功するためではありません。マイホームを買うためではありません。老後を安泰にするためではありません。そうではなくて、礼拝するために私たちは今ここに置かれているのです。いつの日か天に上げられます。そしてそこでも私たちは礼拝するためです。永遠に礼拝します。それ以外のことはいたしません。ですから今私たちがここで、天における永遠の生活の前味を味わうことが許されているわけです。ちょっと天の素晴らしい天国生活の気分を試食できているわけです。この試食こそが「公同の礼拝」です。天には一つの教会しかありません。地上にはいくつもの教会がありますけれども、天にはたった一つ、みんな同じ所に集まって礼拝します。千年王国にも、一つ、エルサレムでイエス・キリストを拝するという仮庵の祭りを通した礼拝もありますけれども、それも天の礼拝のモデル、型ということでもあります。私たちも地上で礼拝をする。これも天の教会の礼拝の様を模したものです。リハーサルしているようなものだと言ってもいいかもしれませんが、でも実際に私たちは、御霊を通して直接イエス・キリストに礼拝を奉げることができます。それは、天を待たずしても今出来ていることですが、でも地上の教会は完全ではありません。そこには罪があります。罪に侵された肉体をもって礼拝する時も、限界があります。『心は燃えていても肉体は弱いのです。』霊が燃えていてもというのが直訳ですが、もっともっと神様を賛美したい、でも眠くなるんです。もっと神様を知りたい、でも私たちの脳ミソには限界があります。でもこれからは違います。かの日は近いです。体が贖われる日がやって来ます。罪を犯さなくていい、限界を感じない、思いっきり24時間それこそ時間を忘れて。もちろん時間から外れていくわけです。全く新しい次元に私たちは入っていきますから、永遠に主を賛美する、そういう日が近いと、楽しみにして頂きたいと思います。その日を楽しみにしながら、私たちは集まっているかどうか考えて欲しいと思います。ただの義務感から、クリスチャンだから、仕方なしに、礼拝に行かなけれ

ば他の人にどう思われるか分からないから、礼拝に行けば何か良いことがありそうだから、ご利益がありそうだから、いろんな目的で動機で集まる人もあろうかと思えます。クリスチャンになりたての頃はそれでも構いません。なぜならば知らないからです。でも今、皆さんはこのことを知って、知らされて、初めて聞いた人もいるかもしれませんが、これからはそうであってはなりません。何のために礼拝に集まるのか、何を期待するのか、何を目標とするのか。共に集まって「公同の礼拝」を奉げる時に意識しなければならないポイントを、御言葉から押さえて欲しいと思えます。

そして、一緒に集まるということは、奨励もされておりましてけれども、命令もされていたということで、詩篇 34 : 3 も参考までに聞いて頂きたいと思えます。

私とともに主をほめよ。共に、御名をあげよう。(詩篇 34 : 3)

命令されてます。私と共に主をほめよ。共に、御名をあげよう。「公同の礼拝」が命令されてます。私たちは共に集まって主をあげる、主にほめ歌を歌うということが、ここでは命令されてます。

他にも

私の足は平らな所に立っています。私は、数々の集まりの中で、主をほめたたえましょう。(詩篇 26 : 12)

ダビデは集会の中で「公同の礼拝」を奉げることを常に心がけていました。一人でも勿論礼拝できます。個人礼拝を私は否定しているのではありません。または家族礼拝、家庭礼拝を否定しているのではありません。逆に個人でも礼拝し、家族でも礼拝し、そして、「公同の礼拝」も奉げるべきだと言っているわけです。「公同の礼拝」を奉げない代わりに、個人で礼拝するとか、家で身内で礼拝するとか。代用にはならないということです。逆にもっと言えば、「公同の礼拝」を奉げる者は、勿論個人でも礼拝する者でもあります。勿論家族で礼拝を奉げる者でもあります。「公同の礼拝」を奉げる者、それは本当の礼拝者ですから、日曜日だけ教会に行って礼拝を奉げる、いわゆるサンデークリスチャンという者ではなくて、日常礼拝を奉げる者です。日頃からですね。詩篇 89 : 5 を参考までにお読みします。

主よ。天は、あなたの奇しいわざをほめたたえます。また、聖徒たちの集まりで、あなたの真実をも。

(詩篇 89 : 5)

「聖徒たちの集まり」という言葉が見られます。「公同の礼拝」です。

また、主を民の集会であがめ、長老たちの座で、主を賛美せよ。(詩篇 107 : 32)

こちらでは明らかに命令形となっています。「公同の礼拝」は、聖書では何度となく命令されてます。意外と気付かないことかもしれませんが、実は「ハレルヤ」という言葉は、これは命令形です。「ハーラル」という言葉と「ヤー」という言葉から成り立ってます。「ハーラル」とは、これは複数の相手に対する命令形です。「ハレルヤ」の意味は皆さん知っていると思えます。単に「主をほめたたえる、賛美する」という意味に捉えている人もいるかもしれませんが、これは実は命令形ですから、「ヤー」とはヤーウエのことです。主のことです。直訳をすれば、言語のそのままのニュアンスを字義通りに受け止めれば、「ハレルヤ」の意味は、「あなたがたは、ヤーウエを賛美しなさい。」という命令です。「ハーラル」とは、「賛美しなさい」という命令ですが、特に複数の相手に対しての命令です。「ハーラル」はもっと突き詰めて言いますと、「輝き出る」という言葉からきてますから、実は太陽が輝くということも深い関係がありますから、「ハレル

ヤ」というのは、天気が晴れているのと何ら関係がない話ではなくて、実際にはまさにその通りなんです。
「ハレルヤ」天気がいい時、太陽が輝いている時、そこからきているんです。主の栄光が輝き出るように
賛美しなさい、というのが「ハレルヤ」であります。主のすばらしさが、前面に押し出されるように、太
陽光線のように、日光のようにサンサンと輝くように、あなたは主の素晴らしさをたたえなさい。これが
「ハーラル」という言葉ですから、一概にあながち、不謹慎ではないのです。「ハレルヤ」と天気を見て言
っても。「あなたがたは、主を、ヤーウエを賛美しなさい。」あなたがたという複数ですから、独り言のよ
うに「ハレルヤ」と言うのは、無味乾燥なものです。むしろこの意味合いをしっかりと理解して、くみ取
っているならば、複数のところで、二人でも三人でもイエスの名によって集まるところで「ハレルヤ」と
言ってほしいと思います。だれもいないところで「ハレルヤ」と言っても、それは独り言のようなもので
す。厳密には。言っただけとはいっていないのではありませんが、実際には、複数の相手に対してこれは
命令しているのです。もし賛美していない人がいたら、「ハレルヤ」と言って下さい。是非、「ハレルヤ」
の意味もしっかり押さえて頂いて、その「ハレルヤ」の使われている詩篇を今開いて、皆さんに読んで頂
きたいと思います。詩篇 135 : 1

ハレルヤ。(あなたがたはヤーウエを賛美しなさい。) 主の御名をほめたたえよ。(ヤーウエの御名をほめた
たえよ、命令です。) ほめたたえよ。主のしもべたち。(ここでは複数形が使われています。)(詩篇 135 : 1)

ハレルヤ。まことに、われらの神にほめ歌を歌うのは良い。まことに楽しく、賛美は美しい。

(詩篇 147 : 1)

ほめ歌を歌うのは良いこと。アーメンですね。まことに楽しく、賛美は美しい。注目して頂きたいのは、
これは複数で揃って、声を合わせて、共に、共同の賛美・礼拝を奉げることは、特に良いわけです。一人
でも出来ますが、みんなで賛美することは良い、楽しい、美しい。このあたりはすべて『ハレルヤ詩篇』
と呼ばれるものです。ずっと「ハレルヤ」で始まり、「ハレルヤ」で結ばれている、『ハレルヤ詩篇』。ず
っと続くわけです。

ハレルヤ。主に新しい歌を歌え。聖徒の集まりで主への賛美を。(詩篇 149 : 1)

ここも「共同の礼拝」に集まるように。そこで賛美を奉げるようにとの命令であります。ですから「共同
の礼拝」は、聖書で明らかに命令されています。だから私たちは集まるのです。それは、聖書が命じてい
ることだから、それは神様が望まれている御心だからです。「いや私は一人でいいんです。神様と一対一が
いいんです。大勢の人はどうも苦手です。あんな下手くそな連中と歌を歌いたくありません。」とか。と
んでもないです。あなたがクリスチャンならば。神様が命令されていること、何を望まれているのか、覚
えて欲しいと思います。気分を決めることではありません。それは、あなたが王様気取りの時はそうかも
しれません。「私が王様ですから、今日はそういう気分だから、礼拝に行きましょう。調子がいいから、鼻
歌が歌えそうだから、今日は賛美に教会に行きます。」完全なる主客転倒です。誰が王でしょうか。誰が主
でしょうか。是非、これは主からの命令でもあるということ、覚えて欲しいと思います。そして賛美を
受けるにふさわしい方こそ、教会におられます。

あとは「共同の礼拝」を通して私たちが受ける様々な祝福というもの、また恵みというものを、沢山あ
るのですが、限られた時間の中で、皆さんにいくつかお分かちしたいと思います。これだけがすべてとい
うわけではないですから、参考までに皆さんに紹介します。もちろん聖書にはこれ以上の「共同の礼拝」
を通して、「共同の礼拝」がもたらす様々な恵み・特権もありますけれども、そのほんの僅かを、事例を紹

介したいと思います。

まず詩篇 133 : 1 を開いて下さい。よく知っていると思います。都上りの歌、これもダビデの歌です。都上りというのは、エルサレムに巡礼に行く時の歌です。前にも話したと思いますが、この都上りの歌は、イスラエルの民がエルサレムに巡礼する時に、常に賛美して、エルサレムを目指して行く時に歌われる詩であります。歌詞ですから、教会に行く時とてもこの都上りの歌が助けになるとと思います。礼拝に行く前に、この詩篇、都上りの歌を読んで臨むのもいいかと思ひます。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。

(詩篇 133 : 1)

『仮庵の祭り』のことを少し触れましたように、そこではみんなが集まって一週間キャンプをするわけです。文字通り信仰者たちが集まって、一つになって住むということ。これは、素晴らしい、幸せな、楽しい体験となります。一緒に集まって主をたたえる。一緒に集まって主の臨在を深く味わう。主のなされている素晴らしい御業に共に目を留める。共にこの方に向かって祈りを奉げる。心一つにして、声一つにして、賛美をささげる。素晴らしい体験です。何故そんなに素晴らしいかと言うと、それは天国の体験だからです。天国気分を味わいたいならば、共に集まって、共に礼拝を奉げる。これは、他では絶対に味わえないことです。一人ではある程度良い体験は出来ますけれども、それでは不十分です。ありとあらゆる快樂・娯樂をはるかに超えた楽しい体験となります。そのように私たちが集まることを勿論父なる神様も喜んで下さいます。父は私たちのことを子供とみなしております。私たちは皆、イエス・キリストを信じる信仰によって神の子供とされる特権が与えられています。その子供たちが、お父さんのすごさを、素晴らしいさを、偉大さをたたえるわけです。そして、この方と一緒に私たちは食卓にあずかるわけです。一緒に住んで、一緒に暮らす。これが礼拝生活です。

そして、もし子供たちがお父さんの家に集まらずに、また家にもバラバラだったらどうでしょうか。「ご飯だよ。」と言って、子供たちが一つのテーブルに集まる姿。素晴らしい、麗しい姿であります。でも「ご飯だよ。」と言っても、めいめいが「私は自分の部屋で食べます。私はリビングで、私は廊下で、私はこんな家では食べたくない、道路で食べます」とか、そんな家族だったらどうでしょうか。バラバラです。めいめいが勝手に、勝手な活動をする。一つに集まろうとしない。「私は一人で礼拝します。私はインターネットで。私は CD でも聞いて、一人で賛美でもします。」それはどういう姿であるか、想像してみてください。その姿を父がご覧になっている時に、父の心はどうでしょうか。喜んでいると思うでしょうか。それとも傷んでいると思うでしょうか。子供たちがてんでバラバラ。好き勝手な行動をしている。それとも子供たちがみんな同じ所に集まって、心一つにして、同じお父さんを拝している。みんなで共にお父さんに対する愛を歌にして、メロディーにして、奉げている。どちらの方が素晴らしいかは、一目瞭然だと思ひます。それは私たちにおいても最高の幸せ、喜びです。バラバラよりもはるかに素晴らしい体験です。

他にも「共同の礼拝」がもたらす祝福として、Ⅱ歴代誌 5 : 13。この聖句だけ取り上げますから、その前後も是非、あまりよくここの背景を知らない方は、読んで欲しいと思ひます。

ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。そして、ラッパとシンバルとさまざまな楽器をかなでて声をあげ、「主はまことにいつくしみ深い。その恵み はとこしえまで」と主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。(Ⅱ歴代誌 5 : 13)

特に注目して頂きたいフレーズは、「まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせた」。楽器

の演奏者たちも歌うたいたちも、そして祭司という人たちレビ人、一般の礼拝者たち、みんなが一つになってまるでひとりの人であるかのように主に賛美をささげる。一致した賛美がもたらす祝福は何か。主の宮が雲で満ちるのです。この雲というのは、触れることができるような、肌で感じられるような、主の臨在です。主の臨在が本当にその雲のように、まるで目の前にあるかのように、本当に近くに感じられるように、身近なものとなるわけです。それがもう満ち満ちるんです。これが「公同の礼拝」がもたらす素晴らしい祝福であります。もし私たちが、一つとなって、一致して、一つの声で、まるでひとりの人であるかのように。教会というのは、まさにひとりの人なんです。私たちはバラバラではありません。ひとりの花嫁です。エペソ 2 : 15 にも「私たちは新しいひとりの人につくられた」というふうに書いてあります。

ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、(エペソ 2 : 15)

イスラエル・非イスラエル、異邦人とユダヤ人のその垣根は、その隔ての壁は、イエス・キリストによって打ち壊されて、私たちはひとつとされ、新しいひとりの人に造りかえられました。それがキリストの花嫁です。イエス・キリストを信じるユダヤ人と異邦人の信仰の共同体こそ、教会というところです。その私たちが本当に文字通りひとりの人として、同じ主をほめたたえるならば、必ず主の栄光は本当に肌で感じられるほどに、あなたにとって身近になります。教会はイエス・キリストの臨在で一杯になります。これは一人で賛美することとは大違いであります。

他にもこの一致を通して私たちが素晴らしい祝福を受けます。それはもう自分自身とその「公同の礼拝」の中で、集団の中で、まるで消えていくような体験です。個性が打ち消されると言っているのではありません。ある程度はそうなりますけれども、バラバラの状態でなくて、ひとりの人に造りかえられますので、まるで自分が消えていくような体験、みんなと一緒にひとつになるような体験。これは素晴らしいのです。というのは、私は、皆さんもそうだと思いますけれども、あまりに私たちは自分自身というものにとらわれ過ぎています。自分、自分、自分と。自分のもの、これに私たちはとらわれ過ぎ、振り回され過ぎ、そして意識し過ぎです。それで私たちはいろいろ思い煩ったり、恐れたり、傷ついたり。そういうことを私たちは繰り返しているんですが、それは、一言で言えば、自分にとらわれているからです。ところが「公同の礼拝」に行くと、その自分が消えてしまうんです。とらわれていたその状態から、ある意味解放されるわけです。自分を失うことは、ちょっと怖いことかもしれません。でも実際に「公同の礼拝」を通して私たちは、自分自身の自己中心の部分が、本当に消えていくようで、そしてみんなと一致できるその素晴らしい体験は、自分から自分を解放するという、そういう体験であります。それが英語で言うところの”ecstasy”です。”ecstasy”という言葉は、文字通り自分の外に立つという体験です。もう自分にとらわれていない、自分の外に立つということです。そのようにして自分の束縛から解放されて、そしてみんなと同じになる、ひとつになる。これはひとりの人となる体験。キリストの花嫁としてひとつの心になる体験です。自分を王としないで、神を王とする。主は、イエス・キリストであります。私たちはもう主でなくていいんです。自分がいつも主体でした。自分の考え、自分のやりたい事、自分の夢、自分の欲望、こればかりが常に支配していたわけです。でもこれからは、主が、イエスが私たちの人生の主となって下さる。そのことをまざまざと体験できるのが、「公同の礼拝」であります。ひとつの歌をうたう時、例えば国歌を歌う時、国民は心をついにできます。賛美とは、ある意味で神の国の国歌と言っていると思います。長野県民であれば、県歌があります。『信濃の国』を歌えないのはよそ者だと。私は歌えないので、信濃人からしたら、よそ者と思われてしまうかもしれません。でも、それと同じように、神の国の国歌、賛

美歌を一緒に歌う。これで私たちはひとつとなります。お互いの違いはあれども、私たちは同じ天国人だ、同じ神の民である。礼拝する民、礼拝するために集う集会する民、これが私たちであるということを再確認できます。ですから「公同の礼拝」は素晴らしい祝福をもたらします。一致した賛美は素晴らしい解放を私たちにもたらします。お互いの違いを超えるだけでなく、分裂・分派も無くしてしまいます。考え方が違う、価値観が違う、神学の立場が違う、そういったことも実は「公同の礼拝」がすべて吹っ飛ばしてくれます。そんな違いはどうでもいい。もちろん救いの根幹に関わるような神学の相違は、これは一致にはつながりませんが、でも細かいところで、救いの根幹に関わらないちょっとした見解の違い、そんなことでいちいち分裂する必要はありません。でも私たちはこだわって、自分と同じ考えでない者とは一緒に礼拝なんて出来ない、そう言っている間はこの素晴らしい「公同の礼拝」の祝福には預かれませんが、もしあなたが「公同の礼拝」に集うならば、そのような小さな違いは、吹っ飛んでしまいます。哲学の違い、神学の違い、人生観の違い、世界観の違い、すべて吹っ飛んでしまいます。

他にもⅡ歴代誌 20：15～23 まで。背景としては、エルサレムが敵軍に囲まれて、絶体絶命の窮地に追い込まれているというところ。そこで主が用意された救済策とは、どんなものであったのか。

15：彼は言った。「ユダのすべての人々とエルサレムの住民およびヨシャパテ王よ。よく聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられます。『あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。（敵のことです。）気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。

16：あす、彼らのところに攻め下れ。見よ。彼らはツイツの上り道から上って来る。あなたがたはエルエルの荒野の前の谷のはずれで、彼らに会う。

17：この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。』

18：それで、ヨシャパテは地にひれ伏した。ユダのすべての人々とエルサレムの住民も主の前にひれ伏して主を礼拝し、

19：ケハテ族、コラ族のレビ人たちが立ち上がり、大声を張り上げてイスラエルの神、主を賛美した。

20：こうして、彼らは翌朝早く、テコアの荒野へ出陣した。出陣のとき、ヨシャパテは立ち上がって言った。「ユダおよびエルサレムの住民よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたの神、主を信じ、忠誠を示しなさい。その預言者を信じ、勝利を得なさい。」

21：それから、彼は民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に出て行って、こう歌うためであった。「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」

22：彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。

23：アモン人とモアブ人はセイル山の住民に立ち向かい、これを聖絶し、根絶やしにしたが、セイルの住民を全滅させると、互いに力を出して滅ぼし合った。

最期は、敵は同士討ちして自滅したんですけれども、注目すべきは、この四面楚歌の状態で神様が用意した勝利の約束というのは、主をほめたたえる、いわばクワイアーのような人たち、ワーシップチーム、聖歌隊を、第1戦においたわけ。戦いにおいて賛美する者たち、または賛美することを第1戦におく時に、あなたは必ず勝利を得ます。敵に囲まれた時、霊の戦いにある時、賛美して下さい。もちろん一人で

はなくて、共に、クワイアーでもいいです、聖歌隊でも、もちろんそのようなグループでなくても、本当に兄弟姉妹が集まって、同じ主に向かって、「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」と、賛美を奉げて欲しいと思います。するとその賛美が敵陣を完全に攪乱して、敵同士、同士討ちになって、あなたには勝利が転がり込んで来るわけです。あなたは別に戦いません。主が戦います。あなたがやることは、ただ主を賛美することです。心合わせて、共に、主を信じて、預言者の言葉を、聖書の言葉を信じて、ただ主に向かって賛美する。あまりにも非合理的だと思います。武装した敵に対して、賛美するなんて。そんなことで勝ち目ありません。そんなの自殺行為です。そんな聖歌隊を第1戦におくなくて、戦陣におくなくて、馬鹿らしいとあなたは思うかもしれません。でもやって見て下さい。信じてみて下さい。もしあなたが敵に囲まれて、「もうにっちもさっちもいかない、八方ふさがりです、四面楚歌です、もう敵にしてやられるだけです、敗北は目に見えています、もう降参するしかありません。」と、絶体絶命ですという時に、是非賛美をしてみてください。共に賛美をささげてみて頂きたいと思います。その賛美はどうして敵の陣営を攪乱させたのかというと、賛美の歌声は敵にとってはこの上ない不快感だからです。賛美されると、虫唾が走るんです。例えば、私が嫌いな不快感は発泡スチロールをキーと鳴らす音とか、黒板に爪を立ててキーと鳴らす音、マイクのハウリング音だとか、聞くだけで鳥肌が立つとか、想像もしたくないというような音がありますね。そんな音があったら、蚊の音。そういった不快感です。私たちの「共同の礼拝」を通しての賛美も、ふたりでも三人でもイエスの名によって集まる時の賛美も、みな共同の賛美、これは敵にとっては虫唾が走るような不快感です。彼らは、攪乱され、困惑し、そして敗走していきます。サタンにとっての不快感。もうここにはいられない。誘惑しようと思ったけれども、圧力をかけようと思ったけれども、攻撃しようと思ったけれども、賛美を始めちゃったからもうここにはいられない。是非やってみて欲しいと思います。それが勝利の約束が伴う最高の防御策でもあり、攻撃でもあります。

最後に、このテキスト、ゼカリヤ14章では、万軍の主である王を礼拝するということが言われてましたけれども、王を礼拝するということが、当然王という人格をお持ちになっている存在に対して、賛美の歌なり祈りなり奉げるわけですので、当然礼拝というものにはこの王との、神との人格的な交わりが含まれるわけです。礼拝というのは神との人格的な交わりです。これを多くの人は忘れていきます。礼拝の対象をそっこのけで、礼拝を礼拝する人がいます。また賛美をさんびする人たちもおります。ちょっと分かりづらいかもしれませんが、例えば賛美の際に自分の好きなメロディーやビート、そういった歌のジャンルなり歌詞なりにすっかりと酔いしれてしまう。これは賛美をさんびするようなものであります。または礼拝の雰囲気、それにすっかり魅了されてのまれてしまう。それは礼拝を礼拝するということです。または礼拝のプログラムなりスタイルを礼拝するということになります。感情の高まりが伴ってきます。それを否定するつもりはありませんが、でもそこに酔いしれてしまうのは、危険なことです。私たちは万軍の主であるお方、王である方、イエス・キリストを礼拝するのであって、礼拝を礼拝する、礼拝のプログラム・スタイル・賛美を礼拝するものではありません。好きな歌を歌って酔いしれる。雰囲気を、感情の高まりを、それを満喫してそこに酔いしれるならば、それはもはや人格的な交わりを失った、礼拝とは言えない、ただのエンターテインメントに過ぎません。礼拝を礼拝する、賛美をさんびすることはあつてはならないことです。だからこそ MGF では、御言葉の学びに重きをおいております。強調をおいております。なぜかという私たちは万軍の主、王の王、主の主を個人的に人格的に知れば、間違いなく正しい礼拝を奉げることができます。でもこの方を知らなければ、ただの雰囲気だとか、または感情の高まりだとか、音楽そのものに私たちは酔いしれて、それで礼拝しているつもりになってしまいます。でもそれはひとえに神を知らないからです。神を知るためには、聖書の言葉が用意されております。

ここで詩篇 119 : 171 をお読みしたいと思います。

私のくちびるに賛美がわきあふれるようにしてください。あなたが私にみおきてを教えてください。

『みおきて』というのは勿論聖書のことです。御言葉のことです。賛美と御言葉は切っても切れない不可分のものです。「今日の礼拝は賛美礼拝にしましょう。御言葉のメッセージは、今日はキャンセルします。賛美で今日は全部時間を使いましょう。」そういう教会もあります。そういう教会こそ、まさに賛美を賛美している教会です。礼拝を礼拝している教会です。神様がどんな方か分からないので、ただその雰囲気を楽しみたい。ただその感情の高まりが快感である。歌に酔いしれたい。涙を流して、号泣して、それがエクスタシーなんですね、彼らにとっては。でもそれは生きた真の神との人格的な交わりを確かに持ったということにはなりません。この礼拝を通して、あなたは神様に近づけたかどうか、本当にこの方を個人的に知ったかどうか、それが礼拝の後に残らなければ、その礼拝には価値がありません。「今日はいい歌だった。楽しめた。一緒に歌を楽しめた。この雰囲気が良かった。泣けたし。」神様のことを個人的に、人格的にほとんど知ることもなく、礼拝に集う前よりも集った後、全然変わっていないならば、その礼拝には何の価値もありません。礼拝に集う前よりも、礼拝を終えた時に、ますますこの方が分かるようになりました、本当にこの方に私は近づくことができたと思います、ただの感情レベルだけではなくてですね。本当に霊的な一致というものをこの方と持つことが出来たように感じ取れます、というのであれば、その礼拝は健全なもの、それは正しいものであります。箴言 19 : 2 には

熱心だけで知識のないのはよくない。という御言葉があります。熱心な人たちは、結構教会には集ってきますけれども、知識の無いのは良くありません。A・W・トーマーという人は

「礼拝は礼拝者が高い神観念を抱くか、低い神観念を抱くかによって、純粋なものにも、また不純なものにもなる」と。

神をあがめるのであれば、どのような神をあがめているのか。そのことをしっかり知っていなければ、同じ行為を行っていてもその行為を神はお喜びにはならないことになってしまう。続けてトーマーは言います。

「今日のキリスト教会の上にのしかかっている最も重い義務は、キリスト教会の神観念をもう一度神に、そして教会にふさわしいまでに清め、かつ高めることだ」と。

アーメンと言いたいと思います。神様を正しく知れば知るほど、御言葉を通して神様のことを深く知れば知るほど礼拝は充実したものとなります。さらに清い純粋なものになります。でも神様を知らずに勝手な神観で、勝手な自分のイメージで、それはもはや偶像と言ってもいいかもしれません。自分が作り上げた神像です。それをあなたは賛美しているのです。それは偶像礼拝にもなりうることです。教会の礼拝が、偶像礼拝になってしまう。恐ろしい危険なことでもあります。だから私たちは御言葉を学ぶことに重きを置いてます。御言葉を学べば学ぶほどあなたは、神をほめたたえずにいらなくなります。賛美が湧き溢れてくるのです。ただ頭でっかちになるのではありません。ただ情報を得る、それで自慢するのではありません。そうではなくて、あなたは、もうこの方をほめたたえずにはいられない、もうこの方の前にひざまづいてひれ伏すほかはありませんと、それほどまでに神様の臨在に圧倒されるんです。ですから御言葉を通して神を知れば知るほどあなたは礼拝者になります。霊とまことによって礼拝する真の礼拝者になります。そのことを目指して、今こういう時間が主によって備えられている。それは、あなたが主を礼拝す

るためです。それ以外の目的はありません。バイブルスタディーに来て、ご利益があるわけではありません。あるとするならば、それを祝福と言い換えるならば、それはあなたが礼拝者になれるということです。

東方の博士たちは、年端も行かない幼子のおそらく2・3歳のイエス・キリストのもとへ、礼拝しにやってきました。遠路はるばる、今のイラクからやって来たわけですから。何か見返りを求めにやって来たものではありません。というのは、幼子に礼拝を奉げたって、何も見返りはありません。黄金、乳香、没薬を奉げました。礼拝は見返りを求めるための行為ではありません。純粹にこの方は王である。私たちはユダヤ人の王を拝みに来ましたと、東方の博士たちは言いました。だからといって見返りを求めません。さらにもっとすすんで言うならば、この幼子はまだ十字架にかかって死んでもいないんです。このことも重要なポイントです。イエス・キリストがわたしのために、〇〇こういうことをして下さったから、私は礼拝に来たんです、賛美をするんです。それも悪い動機ではありませんが、実際のところ東方の博士たちは、まだイエスが自分たちの罪のために十字架にかかって死んで下さって、よみがえって、そのことを感動して、感謝して、礼拝に来たのではないのです。これも大きなポイントです。では、何でしたのか。シンプルな理由です。この方はユダヤ人の王だから。それだけです。この方は神様ですから。ただそれだけです。私たちが礼拝する動機も今探って頂いて、何か私たちは見返りを求めるために教会に、礼拝に集っていないだろうか。または、神様が自分の為に良くして下さいから礼拝に来ている。「今週はこんな素晴らしい祝福を頂いた、だから。今週はこんなに良くしていただいた、だから献金します、だから奉仕します、だから賛美の歌を歌います」ではなくて、幼子のイエス、何もしていないイエスでも、ただその存在だけでこの方は王である、神様です。神であるが故に礼拝を受けるにふさわしい、ただそれだけの理由で私は礼拝するんです。特別何もありませんでした。宝くじが当たったわけでもない、病気が治ったわけでもない、そのお礼にではないんです。何もして下さいさなくても、この方は賛美を受けるにふさわしい方で、ただその存在だけで、神であるが故に、王であるが故に、私たちはこの方を礼拝するのです。それが私たちの礼拝の正しい姿勢であります。勿論神様が良くしてくださったことを体験すれば、当然賛美は口から湧いて出てきますけれども、でもそれを待っていては賛美は途絶えてしまいます。神様があなたに何かしてくれたから、だから、では賛美は途絶えてしまいます。賛美を受けるにふさわしい方ということは、何度となく聖書に出てきます。

「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」(黙示4:11)

まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。

(詩篇 96 : 4)

主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。(詩篇 145 : 3)

まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。

(I 歴代誌 16 : 25)

このように何度となく、主は主であるがゆえに礼拝を受けるにふさわしい方。この方が、存在自体が、もう私たちが共に集まって礼拝する立派な動機になっている、というよりもそれこそが唯一の正しい礼拝の動機と言っていいと思います。何かをして下さったから、ではありません。共にただ歌が歌いたいから、ではありません。何かいいことにあずかれそうだから、ご利益目的で集まるものではありません。もし、あなたがこの方を知れば、待ったなしであなたは、賛美する以外には出来なくなります。礼拝せずにはいら

れなくなります。でも、この方を知らないから礼拝にそれほどの価値をあなたは、多分感じないのかもしれませんが。他のことを優先してしまう、というのはひとえにあなたがこの方を知らないからです。知ってしまえば、もう他の活動はできません。だからと言って、ここで生活しなさいと言っているわけではありません。教会でみんな集まって、朝から晩まで礼拝しましょうと。それが今はできません。制限があります。でも天ではそれができます。極端なことを言っているではありません。本当にそのことが実現する日がやって来ます。今は仕方がないんです。この世は罪によって汚染されて、そして私たちの体もまた罪の性質を抱えたものですから、今はそれを願っても完全にはできません。でも、ある程度は前味は味わえます。それを出来るということを、特権で与えられているということを、是非覚えて頂いて、この恵みを無駄にしないで欲しいと思います。いつでも出来ると思ったら大間違いです。主の日は近い、ということも先に触れました。だいたいこれで時間が来てしまいましたけれども、仮庵の祭りの時にイエス・キリストがエルサレムで王の王として世界を統べ治められると言いましたけれども、このゼカリヤの14章は、イエス・キリストが地上に来られる約500年前に書かれたものですが、その500年後に文字通りイエスは来られ、そして王は実際に仮庵の祭りにも参加されました。仮庵の祭りの中で、素晴らしい宣言を下されました。それがヨハネの福音書7章に記録されています。最後にそこを読んで終わりたいと思います。皆さんもよく知っているイエスの大宣言です。これをイエスは大声で言われました。**ヨハネ7:37**からです。仮庵の祭りにイエスが参加されているということも覚えて欲しいと思います。礼拝を受けるべき方が、ご自身が、王が仮庵の祭りに参加しています。仮庵の祭りの時には、水注ぎの儀式というセレモニーも行われます。シロアムの池というところから祭司が水を汲んで祭壇の上に水を注ぐという儀式なんです。そのときにハレルヤ詩篇が歌われます。詩篇の120~134篇が歌われるんです。都上りの歌というものでもあります。そして、それは、水を注ぐ儀式で、祭司が先頭にたってみんなが後でゾロゾロついてくるマーチングのような行進曲のようなかたちで歌われます。神殿の階段を1段ずつ、15段あるんですが、1段上がる度に、詩篇120篇、2段目に121篇、3段目に122篇というふうに読んでいくわけです。素晴らしい荘厳な儀式であったということです。そのような水は何故注ぐのかというと、仮庵の祭りですから、荒野の生活を常に想起しているわけです。荒野では水が無かったんです。渴いて死にそうでした。ところが神様は岩を用意されました。その岩は常にイスラエルの民についてまわる岩でした。歩く岩です。すごい岩ですね。そしてその岩が打たれた時に水を出しました。打たれた岩です。もう分かりますね。1コリントの10章にも、その岩とはキリストだと言われています。そしてシロアムの池のシロアムという名前も実は『遣わされた者』という意味です。イエス・キリストは遣わされた者。神に遣わされたメシヤです。キリストであります。その方が本当の渴きを満たす、本当の生ける水を与えて下さる。仮庵の祭りでは神様がその奇跡的な供給をしてイスラエルの渴いた喉を潤したということのを記念するのですが、実際にそのことを想起するために水の儀式を行うんですけれども、でも8日目の大いなる日に、一番のクライマックスの日に、祭司は水を汲む際には敢えて意図的に水を汲まずに空の状態にして、あたかも水を汲んだかのようにして、それでまた神殿に持ち帰って行きます。そして空のその水差しを恰好だけですが、注ぐような真似をします。何故かと言うと、それはもう約束の地に入って、もう奇跡的な供給は不要となったということも指すのですが、同時にこの空の水を注ぐというセレモニーの意味は、それは文字通りの水だけではなくて、超自然的な水、本当のその人の心を満たすところの御霊・聖霊の注ぎを指すセレモニーとしても大祭司が執り行うものであります。ですからそのような瞬間というのは、まさにメシヤを待望する瞬間です。来たるべきメシヤは、この生ける水を、決して渴くことのない水を私たちに注いでくださる、与えて下さる、この方が私たちのすべての必要を満たしてください救世主である。この方が私たちに与えられるその日は近いんだということのを毎回毎回この仮庵の祭りの水注ぎの儀式でイスラエルの民は覚えるわけです。この時代もおそらくは数百万の人たちが全世界からこのお祭りを祝うために集まって来ました。

少なくともイスラエルの成人男子であれば、絶対にこの祭りに参加する義務がある。義務付けられていました。男が礼拝に集うのは、イスラエルの民の間では義務だということも興味深いことです。女子供は当然ついてくるものだ。夫をなんとか引っ張ってくるなんて話はありません、イスラエルでは。むしろ男性が集まって、そしてそこで見ると。イエス・キリストは、その時に沈黙を破って、というのはその時に黙祷するんです。一連のセレモニーの後にみんなで黙祷してメシヤを待望する祈りを奉げます。聖書も朗読されます。その聖書の箇所は、イザヤ書 44 : 3 です。

わたしは潤いのない地に水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう。

という箇所を、今日もそうです。大祭司がこの仮庵の祭りの時に朗読するんです。そして、その時に水の注ぎの儀式も終えて、みんなはメシヤを待望するために、静かに黙祷します。数百万が黙祷するんです。荘厳な瞬間です。そのことをいま頭の中にイメージしていただいて最後にヨハネ 7:37~38 のところです。

さて、祭りの終わりの大いなる日に（今私がお話ししたクライマックスのまさにメシヤを待望して黙祷して静かになってるところです。数百万が。）、イエスは立って、大声で言われた。（沈黙を破るように大声で言われました）「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり」（今読んだ通りにとっているわけです。）、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」（ヨハネ 7 : 37~38）

大声で言いました。声は通ったと思います。イエスが大声でこのことを言われました。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

これをヨハネは次節で解説しています。

これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。

この生ける水というのは、心の奥底からあふれ出るようにしてほとぼしり出る本流のようになるこの水とは、聖霊のことだと言っています。聖霊を与えるのが約束のメシヤだと、聖書は預言していたわけですが、そのことを人々が待望して祈っているその時に、黙祷の沈黙を破るようにして、イエスが大声で、「そのメシヤこそ私だ。」と言ったわけです。わたしを信じる者には、この生ける水の川が流れ出るようになる。あなたの渇きはわたしを信じることで満たされますと、そう宣言したわけです。イエスのもとに行って、この方を信じて信頼すれば、あなたのすべての渇きは満たされます。サマリヤの女に聞いてみて下さい。ヨハネの 4 章に出てくるあのサマリヤの女に聞いてみて下さい。イエスと出会うまでは、彼女は渇いていました。生ける水が与えられました。そしてそのヨハネの 4 章で教えられていたことは、礼拝のことでありました。父がまことの礼拝者たちを求めている。霊とまことによって父を礼拝する者。そのような礼拝者を父は求めておられると。本当に渇きを満たされたいと願うならば、イエスのもとに行ってください。万軍の主、王の王、その方を拝するために、彼のもとに行ってください。そうすれば、あなたの一切の渇きは満たされます。でもこの方を礼拝するために共に集まらないならば、あなたの上には雨が降りません。いつ

までも渴いたままです。折角クリスチャンになったのに。

さらに渴いたっていい。一生いらだって、一生苦々しい思いをして、一生不平不満ばかり言って、恨み辛みばかり言って、教会の文句ばかり言って、牧師批判して、それでいいんですと言うならば、あなたの上には、災いがやって来ます。笑い事ではないほどのことがやって来ると思います。これだけは嫌です、ということが実際に起こります。健康を失うこともあるかもしれません。家族を失うこともあるかもしれません。大切なものを失うこと、それすら呪いとしてあなたが礼拝しないがばかりに、共に集まって「公同の礼拝」を奉げないがばかりに、そういうことも起こりうるということを言っています。ただの脅しで、皆さんを恐怖心で縛りたいのではありません。そうではなくて、これは本当に素晴らしい特権だということをむしろ強調したいと思います。そんな災いを受けたくないから、というよりも、こんな特権にあずからないのはなんともったいないことか。ユダヤ教のシナゴグでは成人男性 10 人が集まらなければ公同の礼拝を奉げられなかったんです。女子供がいくら集まったって、いっしょになって礼拝を奉げることができなかつたのです。会堂と言うシナゴグの時代です。私たちはどうでしょうか。キリストにあっては男も女もありません。10人揃わなくたって、ふたりでも三人でもいいんです。イエスの名によって集まるころには、イエスもその中にいてくださる。こんなに素晴らしい特権は、立場は、ないはず。なのに、私たちは、「忙しいから、面倒だから、遠いから、時間もお金もかかるから、今そういう気分じゃないから」、それは大変な過ちだと、考え違いだということも覚えて欲しいと思います。

最後にそういった「公同の礼拝」を総括して、皆さんも「公同の礼拝」とは、ただの日曜礼拝だと、そういう認識しか持っていなかったという人もいたかもしれません。または「公同の礼拝」とはそんなに素晴らしいものだとは知らなかつた。素晴らしい祝福が伴うんだと。でもそれ以前に「公同の礼拝」は聖書でハッキリ命じられていることだということでもあります。ただ単に日曜礼拝厳守だとか、そういうことを私は律法主義的に皆さんに押し付けようとしているのではありません。神が神であるが故に、私たちはこの方を礼拝する。それは当然のことです。神が王であるから、だから私たちはこの方を礼拝するんです。賛美を受けるにふさわしい方だからです。それ以上の理由もありません。それ以下の理由もありません。この方を是非知って欲しいと思います。知ればこの方の前にひざまづかずにはいられません。どんな犠牲でも、賛美のいけにえを奉げずにはいられません。四六時中礼拝したいとすら思うようになります。それは文字通りその夢は必ず叶います。本当に夢見えていいです。裏切られる夢ではありません。最高の夢です。その日が近いということも楽しみにして、「公同の礼拝」をもっと楽しんで欲しいと思います。ますますそうしようではありませんか。では今日はこれで終わりたいと思います。